359回目のプロポーズ

28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３５９回目のプロポーズ

【Ｎコード】
Ｎ３３９１Ｙ

【作者名】
２８号

【あらすじ】
ついに女子高生を卒業し、先生との同棲を始めた私。
けれどせっかく家族になれたのに、先生は冷たいままだった！！
高校卒業したし、そろそろ手ぐらい出してください！！
――女子高生からワンランクレベルアップした悲劇の少女と高校教師の恋のお話【３５８回目のプロポーズの続編です】――

童話のような恋の始まり（前書き）

３５８回目のプロポーズの続編です

童話のような恋の始まり

昔々あるところに、それはそれは美しいお姫様がおりました。
そのあまりの美しさに、お姫様に結婚を申し込んだ王子の数は１０００を越えるほどでした。
しかしどんなに素晴らしい愛の言葉を聞いても、お姫様は首を縦に振りませんでした。
なぜなら、お姫様には心に決めた相手がいたのです。

相手はお姫様を守る騎士でした。
優しくて強くて、そして他の誰よりも自分を愛してくれる騎士様が、お姫様は大好きでした。
それを知った王様はお姫様の幸せを一番に願っていたので、さっそくお姫様と騎士様を結婚させることにしました。
身分の差はあれど、とてもお似合いの二人を国中が、いえ他の国の民までもが祝福しました。

けれどただ一人、騎士に恋をしていた一人の醜い魔女だけは別でした。
二人の幸せを妬んだ魔女は、結婚式の前日お姫様に呪いをかけてしまったのです。

「美しき姫よ、貴様は我が呪いにより今日この日より愛を得られぬ定めとなった。例え命果てたとしても、新たなる生を得たとしても、貴様は孤独から逃れることが出来ないのだ」

途端にお姫様は死の病にかかり、みるみる衰弱していきました。
死に行くお姫様は愛を得られぬ身となった事を嘆き、騎士様の手をそっと取ります。

「私のことは忘れてください。そしてあなたは幸せになって下さい」

けれど騎士様は首を横に振りました。

「例えこの生で貴方と添い遂げられなくても、私は何度でも貴方を愛します。魔女の呪いが消え、貴方と添い遂げられるその日を迎えるまで」

その約束は二人の愛と絆を強くする魔法に代わり、程なくして騎士様もお姫様の後を追うように亡くなってしまいました。

けれど二人の恋はここで終わりませんでした。

二人は別の世界の、別の時代の別に人間として生まれ変わることができたのです。
全く新しい体でしたが、二人には前世の記憶があったので、目を合わせた瞬間お互いの存在がわかりました。
けれど魔女の呪いはまだ残っていたので、この時も二人の恋は実りませんでした。

その後も二人は何度も生まれ変わり、そして同じ数だけ恋をしました。
けれどもそのたび戦争や、呪いや、身分差や病気などで二人は引き裂かれる運命を繰り返します。それほどまでに魔女の呪いは強かったのです。

でも二人は諦めず、何度も何度も恋をしました。
そんな二人の努力と愛の強さが、神様に届いたのでしょう。
ついに二人は、何の障害もないとても平和な世界の、平和な時代の、平和な国に生まれる事が出来ました。
そして二人は３５８回も悲恋を繰り返してようやく、本当の恋人になれたのです。

童話のような恋の始まり（後書き）

前作未読の方は、そちらから読むことをオススメします。

念願の同棲と先生の手料理

「……めでたしめでたしっと」
作業を終え一息ついている私に、降り注ぐ冷ややかな視線。
けれどその先にいるのは最愛の人だとわかっているから、私はニッコリ笑顔で顔を上げる。
「何してる」
そう言って私の手元に目を落とす彼は、私の元先生で、そして運命の人。
「お仕事です」
「クレヨン使ってか？」
「こういう方が絵本としては味が出ると思うんです。これを出版社に持ち込めば絶対売れます」
「こんな下手な絵で？」
「確かにちょっと不格好ですけど、物語は自信ありますから！　何せ私と先生の大河ドラマ的トゥルーラブですからね！」
そう言った瞬間、先生は絵本をパラパラとめくり、そして最後のページを破り捨てた。
「何しするんですか！」
「フィクションが混ざってたから」
「フィクションじゃないです！」
「誰が恋人だ誰が」
「恋人でしょう！　こうしてひとつ屋根の下に住んでいるのに！」
「今すぐかがみ見てこい」
「それにほら、ご飯だって作ってくれるし！」
そう言って先生が持っていたホットケーキを指させば、彼はそれを引っ込めようとする。
「もういい、お前にはやらん」
「あああ、せっかくの初手料理が！」

「食いたいならそこ片づけろ」
慌ててクレヨンと画用紙を片づけると、先生が私の前にとても美味しそうなホットケーキを出してくれた。
「ああっ、でも食べるのが勿体ないです！」
「お前なぁ」
「先生が始めて私のために作ってくれた手料理ですよ！　これは冷凍保存するべきです！　ホルマリン漬けでも良いです！　とにかくお墓まで持って行くべきです！　むしろ来世まで持って行きたいです！」
「馬鹿言ってんな」
「だって、貴重じゃないですか！」
「もういい、食わないなら俺が食う」
と言って皿を持ち去ろうとする先生の手に私は飛びついた。
「馬鹿やめろ！」
だがその衝撃で、先生の腕が皿ごと傾いた。
そして落ちるパンケーキ。むろん落ちた先は床である。
「あああっ！」
私が叫べば、先生自慢の拳骨が私の後頭部に炸裂する。
「本当にアホだなお前は」
「さっ3秒ルールがあります！」
慌ててホットケーキを拾い上げ、何事もなかったかのように皿に乗せた。
床はフローリングなので目立った外傷はない。よし。食べれる。
「食うな馬鹿」
「でもせっかく先生が焼いてくれたのに！」
このままゴミ箱行きになんてさせない。
むしろゴミ箱に捨てられても私は拾い上げて食べる。
そう宣言しようと姿勢を正せば、唐突に先生は自分のパンケーキを私の前に差し出した。
意味がわからない。理由がわからない。どうして良いかわからな

い。
　そんな顔で先生を見つめている私から皿を奪うと、先生は落ちたホットケーキにバターとハチミツをかけ、さっさと食らいついてしまった。
「先生、それ落ちました」
「3秒ルールだろ」
「そう言う優しさが、胸キュンです。大好きです。愛しています」
　言葉にならぬほどの愛を必死に言葉にしていたのに、ハチミツのボトルで頭を殴られた。
　でもやっぱりその痛みもまた愛おしい。
「私、先生と家族になれて良かったです」
「……その言葉、語弊があるからやめろ」
「だって家族でしょう！　これ家族でしょう！　養ってるでしょう私を！」
　興奮のあまり先生の胸に抱きついたが、残念ながら今の私は先生に腕を回せるほど体が大きくはない。
　それは物足りないが、こうして側にいて、一緒にご飯を食べられるのは凄く嬉しい。
「いやぁ、死んでよかったぁ」
　思わず微笑めば、今度こそ先生が本気で怒った。
「貴様の所為で、子持ちになった俺のことを考えろ！」
「世間的にはそう見えるかも知れませんが、私は奥さんですよ。夜のお供だってバッチリですよ！」
「奥さんじゃねぇし、4歳児に夜のお供なんてさせられるか！」
　先生は怒ったが、私がてへへと笑うとやる気を無くしたように肩を落とす。
「何で俺ばっかりこんな目に」
「運命だからですよ」
　そう言って先生の頬にキスしたら、朝食のパンケーキを取り上げられた。

勿論手を伸ばしたが、頭の上まで持ち上げられてしまったので今度は全然届かなかった。

さすがに、４歳児のリーチは短い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3391y/

359回目のプロポーズ

2011年11月8日03時10分発行